

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 6月 1日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2008年度～2011年度

課題番号：20320134

研究課題名（和文）

アジアの軍隊にみるトランスナショナルな性格に関する歴史・人類学的研究

研究課題名（英文）

Historical Anthropology of Transnational Features of Militaries in Asia

研究代表者

田中 雅一（TANAKA MASAKAZU）

京都大学・人文科学研究所・教授

研究者番号：00188335

研究成果の概要（和文）：

本研究プロジェクトの目的は、ナショナリズムや国民国家創出との関係で論じられてきた軍隊をトランスナショナルな視点から分析することにある。対象は、在日・在韓米軍を含むアジアの軍隊に限り、歴史・人類学的なアプローチをとる。自衛隊のイラク派兵の影響から在韓米軍の再編による地域への影響に至るまで、その研究成果は多岐にわたる。基地反対運動や平和運動もまたトランスナショナル化していることが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：

The main purpose of this project is to understand the transnational impacts of militaries in Asian countries including U.S. military in Japan and Korea. The military activities are transnational in many regards. The object of this project ranges from psychological impacts on Japanese Self Defense Force servicemen by their experiences of the long term deployment in Iraq to the problems caused by the re-organization of the U.S. military in Korea. In addition the transnational nature of the anti-base movement and pacifist movement were analyzed.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
平成20年度	4,800,000	1,440,000	6,240,000
平成21年度	3,800,000	1,140,000	4,940,000
平成22年度	3,400,000	1,020,000	4,420,000
平成23年度	1,400,000	420,000	1,820,000
年度			
総計	13,400,000	4,020,000	17,420,000

研究分野：

科研費の分科・細目：文化人類学、文化人類学・民俗学

キーワード：軍隊・アジア・戦争・平和・トランスナショナリズム

1. 研究開始当初の背景

国民によって組織される軍隊は、国民国家を構成する主要な組織である。国家を国民が軍事的に死守すべき存在とみなすとき、ナショナリズムは完成すると言っても過言ではない。兵士になることは、ナショナリズムの理念を体現し、真の「国民」になることを

意味する。軍隊・兵士と国家、国民、ナショナリズムは密接に結びついているのである。さらには男性こそ真の兵士であるという考え方が支配的であるということに注目すればジェンダー規範とも関係する。そのような国民、兵士・男性、国家という結びつきが垂直的なものとする、複数の国家を横断する

形で軍隊が水平的（トランスナショナル）に存在することもまた事実である。このことは、一般社会においても、学術的な点からも十分注目されてこなかった。本研究の目的は、この水平的な性格を明らかにすることである。

2. 研究の目的

本研究は、4年以内に文化人類学および歴史学的視点から日本を含む東アジア、東南アジア、南アジアを中心に活動している軍隊を、そのトランスナショナルな性格に注目して分析することを目的とする。

3. 研究の方法

在日米軍、自衛隊、ブルネイや香港を拠点としてきたネパール出身のブルカ兵（英国陸軍）、韓国軍と在韓米軍、中国軍などを通文化的、歴史・人類学的視点から資料を収集し、考察してきた。研究は、大きく個別研究と共同研究に分かれる。個別研究はこれまで個々の研究者が行ってきた研究対象をさらに深めていくことを意味し、共同研究はメンバーが共同で一つの課題を研究することを意味する。

4. 研究成果

(1) 個別研究から明らかになったのは、複数の軍隊に認められる歴史的かつ現在のつながりである。さらに、韓国と沖縄の人びとの交流のように、軍事基地を抱えて、土地を収奪されたり、生活環境が著しく劣化したりして苦しんでいる人びとの交流が明らかになった。軍隊のトランスナショナルな展開が、人びとのトランスナショナルなつながりを生みだし、さらには国際政治に影響を及ぼすということが生じている。また、世界的に展開する米軍の移動に伴い、国際結婚を典型とする地域住民との交流が生まれている。軍人相手のセックスワーカーもトランスナショナルな移動を行っていることが明らかになった。セックスワーカーについては、日本が連合軍によって占領されていた時期のセックスワーカーについての言説の研究が行われた。当時の米兵相手のセックスワーカーはパンパンと呼ばれた。パンパンをめぐるテキストは、批判的であれエロティックなものであれ、そこにはパンパンと米兵との「いやらしい」行動——嬌声、人前でのキス、手を組んで歩くといったいまなら許される行為から覗き見によるセックスまで——が描写されていた。米兵と売春婦たちとの痴態を読むことで、男性読者たちは、みずからの「正常性」を確認したであろう。いや、かれらだけではない。男性読者は、自分たちの女性——妻、姉妹、母、娘など——もまた正常であることを確認する。パンパンと異なり、まだ彼女たちは汚されていない。彼女たちは、汚さ

れずにすんだ、墮落せずにすんだ女性なのだ。パンパンの肉体だけではない。彼女たちについてのルポルタージュや『日本の貞操』などの「手記」もまた、外国人男性の圧倒的な力——敗戦国の人間への有無をいわせぬ支配、攻撃、排除、陵辱など——にたいする精神的な緩衝地帯として作用していた。それはまた、日本人男性による米兵の男性性を馴化する試みだった。米兵たちは、性的な他者として日本人男性の前に現れる。そのためには、同じ日本人でありながら「他者性」を帯びた売春婦、そして彼女たちの語り——とくにエロティックな「告白」——を必要とした。米兵のセクシュアリティを馴化する存在であった売春婦たちは、それゆえに同時に危険な存在として他者化され、さらに馴化あるいは排除されなければならなかった。

しかし、パンパンは完全な他者にはなれない。彼女たちはまさにみずからの物語を通じて語り始めるからだ。そして、その語りの中には日本社会の伝統的なジェンダー規範を批判し、米兵がもたらしたあたらしい男女関係を肯定的に捉える者もいた。米兵とつきあっていた女たちが皆みずからの意志に反して処女を失い、日本社会で生きていけなくなった存在というわけではない。またすべてがパンパンであったのではない。現代から見ればけっして不自然ではない形の交際期間を経て、結婚し海を渡った女性もいるからだ。いわゆる戦争花嫁をすべて「貧困のため」と説明するべきではないだろう。女性が勝戦国の男性や物品、そして文化に惹かれるのは不思議なことではなかった。それは、敗戦国の男性には露骨な非難であり、屈辱であった。当然彼女たちの批判は日本の「封建的な」男女関係への批判に通じるものであった。

エンローは、「売春婦と兵士、国家と企業家」[エンロー 1999]と題する論文で、兵士を相手にする売春婦は不可視であるから、その声を聞かねばならない、と主張している。しかし、本研究で取り上げたパンパンたちは、不可視の状況からは程遠いところに位置していた。もちろん、そこに彼女たちの「真の声」が認められるかどうか、そもそも真の声が存在するのか、という問いについてはあらためて問われなければならないかもしれないが、パンパンたちはけっして不可視であったとは言えないことに注意したい。

(2) 共同研究のひとつとして韓国における反基地運動や平和運動、そして在韓米軍の実態についての調査がなされた。今日韓国にはおよそ3万8千の米兵が駐留している。2007年9月現在で34箇所に分散し、33596エーカーの広さの土地を占有している。こうした米軍の駐留を正当化しているのは1967年2月に締結された「韓米軍地位協定」(SOFA)である。これは、1960年1月に締結された

「日米地位協定」（「日本国とアメリカ合衆国との間の相互協力及び安全保障条約第六条に基づく施設及び区域並びに日本国における合衆国軍隊の地位に関する協定」）を模したものである。

2002年6月に、在韓米軍の装甲車が女子中学生二人を轢死させるという事件が起こり、韓国における反米感情が高まる。そうした状況で第34回米韓安保協議に基づき、未来米韓同盟構想協議が2003年4月から発足する。2004年8月には在外米軍再編計画がブッシュ大統領によって発表された。これを受けて、日本や韓国での米軍の再編が具体的な協議事項となる。2005年2月には米韓同盟安全保障政策構想という会合が開催され、在韓米軍の再編（基地・施設の統廃合）が協議された。これによってソウル市内にある龍山基地は平澤と烏山に移転することになる。また南部の大邱・釜山がもうひとつの拠点に位置づけられる。さらに米韓連合土地計画改正協定に基づき、在韓米軍の基地・施設が17カ所に統合、基地の総面積も34%に縮小されることになった。

このような再編の動きにたいし平澤で反対運動が起こり、プエルトリコや沖縄での反米軍基地運動との連携が生じた。しかし、多くの住民が補償金を手にして、住み慣れた家を離れて行った。他方、ソウル以北に位置していた多くの米軍基地も統廃合されることになったが、米軍はソウル北部にある韓国軍の演習場を使用することになる。その結果、韓国軍の演習場を拡大する動きが進行中である。このためムゴンリ周辺では、移住を余儀なくされた地元住民を中心に反基地運動が始まる。しかし、日本と異なり、こうした運動が反軍隊や反核運動に接続することはほとんどない。北朝鮮という脅威が存在するが、米軍の国外排除や韓国軍の廃止を声高に述べる者は少ない。また核問題も、日本に比べるとほとんど問題視されていない。同じことは平和運動についても当てはまる。韓国において平和を求めるのは武器を放棄することを意味するわけではない。徴兵拒否運動などの動きもあるが、これは例外中の例外である。韓国における「平和」とはなによりも民主化の過程で勝ち取った自由を意味する。自由を守るために戦わなければならないのである。日韓のこうした相違が明らかになったことは、本研究の大きな成果であった。軍隊は決して一義的なものではなく、国際的かつ歴史的な文脈の中で考える必要があることが明らかになった。

さらに、韓国については、ソウルの戦争記念博物館と平和博物館設置運動の比較研究が行われた。

以上、個別研究ならびに共同研究による成果から、これまで十分に論じられてこなかつ

た軍隊のトランスナショナルな性格とその影響について明らかになった。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計7件）

- ① 上杉妙子、「移動の時代の市民権と軍務—電子版メディアに見る1997年以前グルカ兵の英国在留権取得をめぐる論争と対立」、南真木人・石井溥編『マオイスト運動の台頭と変動するネパール』明石書店、査読無し。（印刷中）
- ② 田中雅一、「韓国における反基地闘争」『アジアの軍隊にみるトランスナショナルな性格に関する歴史・人類学的研究 韓国レポート』（京都大学人文科学研究所）2012年、査読無し（印刷中）
- ③ 上杉妙子、「戦場ツアーに見る国境地帯の表象—「DMZ&板門店同時ツアー」の通時的比較」『アジアの軍隊にみるトランスナショナルな性格に関する歴史・人類学的研究 韓国レポート』（京都大学人文科学研究所）2012年、査読無し（印刷中）
- ④ 福浦厚子、「基地と社会との関係」『アジアの軍隊にみるトランスナショナルな性格に関する歴史・人類学的研究 韓国レポート』（京都大学人文科学研究所）2012年、査読無し（印刷中）
- ⑤ 田中雅一、「コンタクト・ゾーンとしての占領期ニッポン——「基地の女たち」をめぐる」、田中雅一・船山徹編『コンタクト・ゾーンの人文学 第1巻 Problematique／問題系』晃洋書房、187-210頁、2011年、査読無し
- ⑥ 田中雅一、「運命的瞬間を求めて——フィールドワークと民族誌記述の時間」、西井涼子編『時間の人類学——情動・自然・社会空間』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、115-140頁、2011年、査読無し。
- ⑦ 高嶋航、「1920年代の中国における女性の断髪：議論・ファッション・革命」、石川禎浩編『中国社会主義文化の研究』京都大学人文科学研究所、2010年、27-60頁、査読無し。

〔学会発表〕（計4件）

- ① 上杉妙子「移民退役軍人と軍隊、市民社会：英国陸軍・退役グルカ兵の団体についての分析」第45回文化人類学会研究大会、法政大学市ヶ谷キャンパス、2011年6月11日
- ② 金柄徹「「聖なる義務」の行方：「兵役問題」からみる韓国社会の現在」第45回文化人類学会研究大会、法政大学市ヶ谷キ

- キャンパス、2011年6月11日
- ③ 福浦厚子「コンバット・ストレスのマネジメント：トランスナショナルな視点とローカルな視点からみた自衛隊」第45回文化人類学会研究大会、法政大学市ヶ谷キャンパス、2011年6月11日
- ④ 森田真也「占領という名の異文化接合：戦後沖縄における米軍の社会教育政策と琉米文化会館の活動」第45回文化人類学会研究大会、法政大学市ヶ谷キャンパス、2011年6月11日

〔図書〕(計4件)

- ① 報告書 田中雅一・福浦厚子編『アジアの軍隊にみるトランスナショナルな性格に関する歴史・人類学的研究 韓国レポート』(京都大学人文科学研究所) 2012 (印刷中)
- ② 報告書 田中雅一・上杉妙子編『アジアの軍隊にみるトランスナショナルな性格に関する歴史・人類学的研究 軍隊がつくる社会、社会がつくる軍隊』(京都大学人文科学研究所) 2012 (印刷中)
- ③ 編著 田中雅一・船山徹編『コンタクト・ゾーンの人文学 問題系』第1巻、晃陽書房、2011、282ページ
- ④ 高嶋航『帝国日本とスポーツ』塙書房、2011、312ページ。

〔その他〕

ホームページ等

<http://www.zinbun.kyoto-u.ac.jp/~shakti/trans.htm>

6. 研究組織

(1) 代表

田中雅一 (TANAKA MASAKAZU)

京都大学・人文科学研究所・教授

研究者番号 00188335

(2) 研究分担者

江田憲治 (EDA KENJI)

京都大学・人間・環境学研究所・教授

研究者番号 80176768

小池郁子 (KOIKE IKUKO)

京都大学・人文科学研究所・助教

研究者番号 60452299

高嶋航 (TAKASHIMA KO)

京都大学・文学研究科・准教授

研究者番号 10303900

(3) 連携研究者

上杉妙子 (UESUGI TAEKO)

専修大学・文学部・兼任講師

研究者番号 90260116

金柄徹 (KIM BYUNCHUL)

亜細亜大学・国際関係学部・教授

研究者番号 30316905

田辺明生 (TANABE AKIO)

京都大学・アジア・アフリカ地域研究科・教授

研究者番号 30262215

福浦厚子 (FUKUURA ATSUKO)

滋賀大学・経済学部・教授

研究者番号 90283548

森田真也 (MORITA SHINYA)

筑紫女学園大学・人間科学研究科・准教授

研究者番号 10412686